

自閉スペクトラム症のある学生への就労支援プログラム

—自己理解を含む社会移行の準備性に焦点を当てた取り組み—

○面高有作
(九州大学基幹教育院)

田中真理
(九州大学)

KEY WORDS: 自閉スペクトラム症、就労支援、学内資源の活用

I. 目的

大学における障害学生支援は、入試や修学上の配慮のあり方、大学生活における支援についてなど、修学・生活支援に関する知見の蓄積が進みつつある。しかし一方で、出口の支援である就労支援は、障害学生支援における主要な課題のひとつとされており（障害のある学生の修学支援に関する検討会報告（第二次まとめ）、2017）、共生社会を構築するという観点からも重要なテーマである。

近年、障害者の雇用数は増加しており、障害のある学生の就職率も改善傾向にあるが、障害毎に差があることが明らかになっている（日本学生支援機構、2017）。障害のある学生の進路選択について、障害別に見ると聴覚・言語障害のある学生が最も就職者の割合が高く 67.9%（就職者数／卒業数）であるが、発達障害は 34.8%である。その中でも自閉スペクトラム症（ASD）が最も低く 31.1%であり、発達障害学生に向けた就労支援は喫緊の課題であると考えられる。また、特に ASD 学生にはその障害特性を考慮した、就労支援プログラムを開発していく必要があると言えよう。

これまでも発達障害学生の就労支援に関する組織的な取り組みを行っている大学は少なく、いくつかの先駆的な実践に限られている。先行研究においては、地域と連携し卒後も継続した支援を行うこと（西村、2015）や、発達障害学生の特性に考慮した支援を行うこと（堀江、2013）の意義が明らかにされている。しかし、早期からの就労支援の意義や、学内資源への接続を念頭にいたプログラムの開発については検討が必要である。また、プログラム実施においては自己理解や社会移行に向けた準備性をいかに高めるかが重要であると考えられる。

以上のことをふまえて、本研究では、ASD 学生を対象に就労支援プログラムを実施し、社会移行に向けた準備性への効果について検証する。また、インタビュー調査により、自己理解に及ぼす影響について検討することを目的とする。

II. 方法

1. 対象

X 大学に在学している ASD の診断のある学生 7 名（学部 1 年生～4 年生）であった。

2. 就労支援プログラム

プログラムは「エントリーシート（ES）対策講座」（5セッション）と、「面接対策講座」（4セッション）の計 9 セッションからなる。

なお、プログラムの講師は学内の就職支援担当者（学内就職相談アドバイザーと就職支援担当の事務職員）が務め、筆者ら障害者支援担当者はプログラムの企画・実施をサポートする、コンサルテーションを行った。

3. 評価

1) 質問紙

進路選択に関する自己効力感（浦上、1995）と、就職レディネス・チェック（RCC : Readiness Check for Career planning）をプログラム前後に実施した。RCC は「就職意欲度」「環境理解度」「就職活動理解度」「思い込みからの自由度」「キャリアプラン設計度」から構成される。

2) プログラム後の個別インタビュー

プログラム実施後、1 ヶ月以内に個別の半構造化面接に

て、自己理解の観点から「プログラムにおける気づき」「将来展望」について聴き取った。

4. 倫理的配慮：参加者に対して個別に本研究への同意を取得した。

III. 結果

1. 質問紙

プログラムの前後で進路選択に関する自己効力感に差があるかどうかについて、ウィルコクソンの符号順位検定（Wilcoxon signed rank test）を行ったところ有意差が認められた（ $Z=-2.20$, $p<.05$ ）。また、RCC におけるプログラム前後の比較を行ったところ、3 要因において有意差が認められた（「就職意欲度」 $Z=-2.21$, $p<.05$ ；「環境理解度」 $Z=-2.23$, $p<.05$ ；「就職活動理解度」 $Z=-2.23$, $p<.05$ ）。これらの結果から、将来について肯定的な展望を持つようになったこと、就職活動に関する理解が深まったことが窺われた。

2. 個別インタビュー

紙面の都合により、代表的な発言を以下に示す。

・ES やグループディスカッション（GD）とか。知らなかったことがあった。

・一番ためになったと思うのは、自己分析…一人でできることには積極性を発揮するけれども、大勢の時には消極的・（GD で）困ったからイライラした…困っていると早口になって適当な発言になる。（グループワークのある授業でも）そういうことを言ったかも。

・なかなか人と接するのが難しい自分の特性を考えて、分析作業に専念できるというところで、チェックシートの情報に接する仕事に向いているのかなと考えています。

IV. 考察

本プログラムが、コミュニケーションの質的な困難さにより周囲からの情報を得にくい ASD 学生の就職活動に関する理解を深め、就労に向けた意欲を高めることが明らかになった。また、これらの体験が将来に向けた前向きな展望や、修学・生活面での自らの行動を振り返るきっかけになると考えられた。既存の就職支援の多くは就職活動を行う学年の学生を中心に展開されている。しかし、ASD 学生のように情報と経験が不足しがちな学生にとっては他の学生と同じタイミングで就職活動を始めると「出遅れる」ことが多いと考える。今回の実践より、①事前に適切な情報と活用可能な学内外の資源を伝えること、②障害特性を考慮した体験的な学びを提供すること、③自己理解を深める機会を設けることが必要であると考えられた。

なお、RCC の「思い込みからの自由度」「キャリア設計度」に有意な変化が認められなかったが、これらは ASD 者の障害特性である、多面的かつ柔軟に思考することの難しさや、見通しを立てて物事に取り組むことの苦手を反映していると考えられる。今後、インターンシップなどの社会を強く意識する体験が、障害特性と深く結びつく側面にどのような影響をおよぼすのかについて検討していきたい。

(OMODAKA Yusaku, TANAKA Mari)